

## 多様性と共に生きる

—「ヒューマンライブラリー」の運営を通じた「社会人基礎力」成長の物語—

キーワード：多様性、ヒューマンライブラリー、社会人基礎力

工藤 和宏 矢島 祐作 本橋 由理 榎本 佑紀

### 1. はじめに

本稿は、2010年11月29日に日経ビル（東京都千代田区）で開催された、経済産業省主催「社会人基礎力育成グランプリ2011 関東地区大会」での口頭発表を原稿化したものである<sup>1)</sup>。2006年、経済産業省は「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事する上で必要な基礎的な能力」を表す「社会人基礎力」を提唱した（経済産業省2010）。これは、読み書き計算や情報技術スキルなどの基礎学力、仕事に必要な専門知識、人間性や基本的な生活習慣とともに日本の若者が習得すべき能力のことで、「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の3つの力で構成される（経済産業省2008, 2010）<sup>2)</sup>。2007年には同省の主導のもと「社会人基礎力育成・評価手法の開発等」に関する研究事業が展開され、その成果発表の場としての「社会人基礎力育成グランプリ」が開催されている（経済産業省2010）。第1回大会は、同事業に参加した7校のみの参加であったが、その後は出場校が

- 
- 1) 本大会では惜しくも決勝大会への出場は逃したものの、発表の質が高く評価され、第一筆者である指導教員が優秀指導賞を受賞した。大会への出場に際しては、資料作成や発表の準備段階で多くのゼミ生、とりわけ森日香里さん、道浦由樹さん、田村あゆ美さん、川沼みずきさん、呉淳以さん、片岡雄輝さんの協力をいただいた。また、ヒューマンライブラリー実施の際には、150名を超える学内外の方々の協力をいただいた。筆者一同、心より感謝申し上げたい。
  - 2) さらに、「主体性」、「働きかける力」、「実行力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「情況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」という12の下位要素に分かれている。

増え続け、4回目となる2011年（2010年度）大会では、全国で100（関東地区大会では29）もの大学・大学院が参加した。

今回の関東地区大会では、各出場校の教員1名による3分間の発表と学生3名による12分間の発表、その後の4分間の質疑応答によって、独創的な教育活動を通して学生の「社会人基礎力」がどれだけ育成されたのかを3名の企業人審査員にアピールすることが求められた<sup>3)</sup>。発表に際しては、2010年度の演習（ゼミ）活動として30名の学生が運営したヒューマン（リビング）ライブラリー<sup>4)</sup>を題材にした。後述するように、ヒューマンライブラリーは偏見の低減や多様性にかかれた社会の構築に寄与することを重視しており、ヒューマンライブラリー運営者（大学生）の「社会人基礎力」の育成が活動目的ではない。経済産業省が主催し企業人が審査員を務める大会に、そもそも非営利目的の活動であるヒューマンライブラリーについて発表することは御門違いではないかという危惧もなかったわけではない<sup>5)</sup>。しかし、大会への出場を機に「社会人基礎力」に注目したことは、ヒューマンライブラリーという教育活動を学生個人の成長や異文化学習の観点から見つめなおすうえで有益であった。

大会出場を決めてから1ヶ月間の準備期間では、社会人基礎力の成長をどのように審査員に伝えるのかに最も時間を割いた。観点別自己評価やポートフォリオ作成などの先行事例があるが（経済産業省2008）、学生による自己評価のみに依拠する統計分析では信憑性に問題があり説得的でない<sup>6)</sup>と判断した。また、ヒューマンライブラリーの運営時には、正直なところ「社会人基礎力」の存在を認識してはいなかった。そのため、ア priori に設定された「社会人基礎力」の3つの力（評価基準）を計測する方法ではなく、経済産業省（2008）の「社

- 
- 3) 出場者用手引きには、次のように記載されていた。「予選大会及び決勝大会では、各チームから『どのような活動に取り組み、どのように社会人基礎力を成長させることができたか』についての発表（プレゼンテーション）を行っていただきます。そして、産学の有識者からなる審査委員会で、学生たちの社会人基礎力の成長や知識の深まり等を審査し、社会で活躍できる人材に育ったかという視点で総合評価します。」
  - 4) 英語名称は元々Living Libraryであったが、2010年に「ヒューマンライブラリー」（Human Library）へ名称変更している。口頭発表の部分では、当時用いていた「リビングライブラリー」という表記を用いることにする。
  - 5) 実際、審査員からは「ビジネスとして考えたときに少々弱い印象が残った」というコメントがあった。

会人基礎力レベル評価基準表」を参考にしながら、学生の成長物語を教員と学生の継続的な対話や内省を通して構築することに専念した。

本稿では、第一筆者である教員と第二から第四筆者である学生が共に議論を重ねて構築した、ヒューマンライブラリーを通じての学生の成長物語を紹介する。そのうえで、「社会人基礎力」育成から見たヒューマンライブラリー運営の効果についての所感を結語としてまとめたい。なお、実際の口頭発表は15分間と短く、パワーポイント・スライドによる視覚的情報を多く盛り込んだため、多くの言語情報が欠落している。本稿は、その部分を可能な限り補いたい。また、口頭発表時の様子、とりわけ審査される側（発表者）と審査する側（審査員）の関係性も「成長物語」を構築するうえで重要であったことから、次節での発表部分に関する記述は、発表時と同様の「です・ます」調を用いている。さらに、ヒューマンライブラリーという日本では未開拓に近い活動に関する今後の実践的・理論的裾野を広げるべく、内容面でもできる限り加筆や注釈を加えることにする<sup>6)</sup>。本稿が単なる大会出場報告としてではなく、「社会人基礎力」の育成や「ヒューマンライブラリー」の実践のための基礎的資料として役立てれば幸いである。

## 2. 教員による発表—指導方針とヒューマンライブラリーの紹介

こんにちは。獨協大学外国語学部の工藤と申します。私が担当しています、外国語学部3・4年生対象の異文化コミュニケーション論のゼミでは、課題解決型学習（Project-Based Learning）の手法を取り入れながら、周囲の環境や自分の変化を感じながら他者と共に行動し、議論を積み重ねることで、何かに気づき、新たな価値観を「そうぞう（創造・想像）」することを教育目標にしています。本日は、「多様性と共に生きる—『リビングライブラリー』の新たな可能性の探求」と題しまして、リビングライブラリーという活動を通じた社会人基礎力の育成について発表します。

リビングライブラリーとは、文字通り「生きている図書館」を意味します。日本事務局の説明によると以下の通りになります。

---

6) ヒューマンライブラリーの国内外での展開については、加賀美・横田・坪井・工藤（2012）が詳しい。

障害のある人やホームレス、セクシャルマイノリティなど、誤解や偏見を受けやすい人々を、「生きている本」として貸し出します。読み手は普段あまり触れ合うことのできない本を借りることで、その語り部である当事者から直接話を聞くことができ、自分の持っている固定観念に気づき、新たな視点を得る機会となります。そして、「生きている本」と読者との対話を通して、多様化に対して開かれた社会の実現を目指す試みです<sup>7)</sup>。

文化的差異を超えた対話と相互理解の促進を目指して2000年にデンマークのNGO (*Stop the Violence*) が始めたこのイベントは、現在までに世界40カ国以上で実施されています。日本では、東京、京都、大阪等で十数回開催されています<sup>8)</sup>。運営主体は大学、NPO、企業などで、異文化間教育や多様性トレーニングの点から今後の更なる発展が期待されます。

私共のゼミでは、「日頃気付かない自分に気付こう」をテーマに、リビングライブラリーを本学の学園祭期間中（2010年10月31日）に実施しました。運営には、「司書・Librarians」（運営者）、「本・Books」（語り手）、「読者・Readers」（読み手）の三者が関わります。運営者である30名のゼミ生は、語り手と読み手の30分間の対話空間を創出するために、運営費の確保、語り手への出演依頼、語り手のストーリー作り、広報、危機管理を含む会場設営などを行いました。また、リビングライブラリーの効果を明らかにするため、学生を5つの班に分けて、研究が進められています<sup>9)</sup>。教員としての私の役割は補助的なもので、(1) 適宜、学生に専門的アドバイスをすること、(2) ペースメーカーとして、学生の行動予定を把握し必要に応じて新たな行動を促すこと、(3) 責任者として、重要書類や研究資料の最終チェックと修正を行うことでした。

この後の学生の発表では、リビングライブラリーの活動の経緯と成果についての報告があります。ここでは、多様性に対して開かれた社会の実現に必要な

---

7) Living Library Japan ホームページ (<http://living-library.jp/livinglibrary.html>)

8) 2011年3月20日現在、日本では18回実施されている。「獨協大学リビングライブラリー」は14回目である。

9) 語り手に対する事後アンケートとインタビュー、読み手に対する当日アンケートとインタビュー、ほぼ同時期にヒューマンライブラリーを運営した他大学学生との座談会を実施した（工藤, 2011; Kudo et al., 2011）。

力についての内省、すなわち、楽しみながら他者に働きかけ、共に行動する媒体として成長してゆく物語が語られます。

### 3. 学生による発表—ヒューマンライブラリーの運営を通じた成長物語

透明人間からチャップリンまで。四浪して大学に入った僕は、まるで「透明人間」になったようでした。自分の存在意義すら見失い、外の世界に対して恐怖心まで抱いていた、当時の僕。自分を取り戻す道の先に「活弁」<sup>10)</sup>との出会いがありました。

アザのある人生。僕の母親は、生まれてきた僕の顔を見たときに、「この子と一緒に山の中にももって暮らしたい」と思ったそうです。それくらい、親にとっては衝撃的なことでした。

What's your excuse? 言い訳をしない。二十歳の時、アクシデントで突然、身体を自由を奪われた。その日から始まった車椅子での生活。車椅子に乗ってのリハビリから車椅子での陸上競技へ。

#### 3.1. 説得と交渉

こんにちは。獨協大学工藤ゼミの矢島です。本橋です。榎本です。今日は私たちのリビングライブラリーの活動を通じた成長について、時系列で紹介させていただきます。

私たちが専攻する異文化コミュニケーション論は、多様な人々が関わることで生まれる個人や社会の変化について研究します。リビングライブラリーは、普段出会えない人々の出会いの場をつくることのできるイベントです。リビングライブラリーをゼミのプロジェクトとして開催することにしたのは、私たちが普段、机の上で勉強していることを実践に結びつけるのに最適だと判断したからです<sup>11)</sup>。

まず、4月から7月に行ったことをお話します（図1参照）。この頃の課題は、大学外部の方々に働きかけることでした。

---

10) 活動弁士の略。

## リビングライブラリープロジェクト

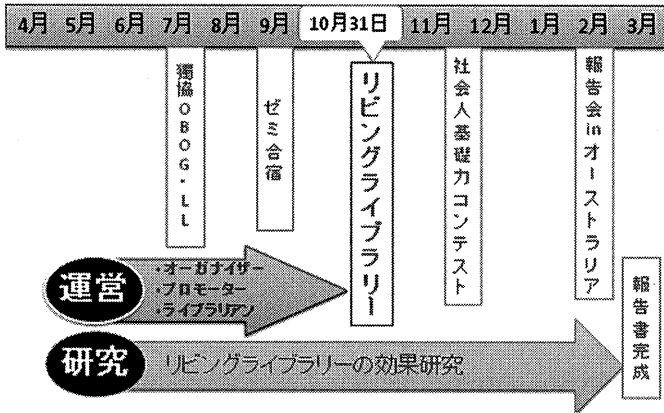


図1 「獨協大学リビングライブラリー」プロジェクト

2,463通。これはなんの数でしょうか。じつは、これは私が4月から10月31日までに送受信したメールの総数です。イベントを開催するためには、ゼミの学生間での調整はもちろんのこと、「本」になってくださる語り手、本学の学園祭実行委員会<sup>12)</sup>、運営資金提供<sup>13)</sup>や広報関連<sup>14)</sup>で協力いただいた50名以上の方々と交渉する必要がありました。

リビングライブラリーを開催するにあたり、まずはじめたことは、語り手探しでした。私たちは、普段なかなか会えない人、「マイノリティ」と呼ばれる

11) 運営準備は、同時期に開催することになった駒澤大学文学部社会学科坪井健ゼミ（「生きている図書館」2010年10月10日実施）と明治大学国際日本学部横田雅弘ゼミ（「ヒューマンライブラリー—この1日で一生の見方を変えてみませんか？」2010年11月28日実施）と情報交換をする形で進められた。また、1年先にヒューマンライブラリーを実施していた横田ゼミがまとめた報告書（2010）や、海外の手引書（Abergel et al., 2005）等を参考にした。

12) 対話のための10以上もの教室や懇親会会場の確保についての交渉を行った。

13) 大学近辺の企業やロータリークラブへの働きかけはうまく行かず、同窓生からの寄付とゼミ生の出費によって運営された。

14) インターネットブログ、学会や専門家組織等のメーリングリスト、大学周辺の学校や商店街などへのちらし配布やポスターの掲示などを行った。

人々を語り手としてお誘いしました。

私たちは語り手を自分たちとは遠い存在の人々だと思っていました。私たちははじめ二項対立で「自分たち」と「語り手の方々」を分けて考えていました。学校のなかにいる「私たち」と社会にいる「彼ら」というように区別していました<sup>15)</sup>。

語り手探しをするうえでぶつかった壁、それが「説得と交渉」です。

何と言って、お誘いすればいいのかわかりませんでした。「社会的マイノリティ」、「普段なかなか会えない人」、そんな人を探していたけれども本人にはそのような失礼な言葉は使えません。

「彼ら」は「私たち」とは違うと考えていたので、初対面の時はどう振舞えばいいのか、わかりませんでした。私たちの言葉で、「彼ら」を傷つけてしまっているのではないかと不安だったのです。しかし、直接会っていろいろな話をしていくうちに、迷いながら説得を続けていくうちに気がきました。語り手の方々は、私たちと同じだということ。目が見えないかもしれない、特殊な職業についているかもしれない。だけど、私たちと同じように生活をし、ジョークも言う。それに気付いた時、私たちの心の壁はなくなり、コミュニケーションもしやすくなりました。

最終的に、私たちは21の団体（企業、官庁、学校、NPO、慈善団体）と9名の個人に働きかけました。

私たちが協力して欲しいだけでは、人は動いてくれません。だから、それぞれが相手の立場に立って、相手がりビングライブラリーに協力するメリットを見つけて交渉しました。

「宣伝の機会になります。」

「普段関わったことのない人にご自身の特徴を知ってもらい、考える機会になります。」

「イメージの改善につながります。」

説得と交渉を重ね、最終的には18名の方を語り手としてお誘いすることができました（表1参照）<sup>16)</sup>。

---

15) 授業では、自己を肯定し他者を卑下する「他者化(Othering/Otherization) (Holliday, Hyde, & Kullman, 2004) や文化の境界の意識化を表わす「句読点 (punctuation)」 (Klyukanov, 2005) 等の概念を学んだ。

表1 「獨協大学リビングライブラリー」当日の「本」(語り手)リスト(「あらすじ」は省略)

ジャンル	「本」のタイトル
セクシャルマイノリティ	脱恋愛結婚家族神話論
セクシャルマイノリティ	二色の現実, 七色の事実
専業主夫	じゃあ, 僕が主夫になるよ
尼僧	つまらないことのできる人
活動弁士	透明人間からチャップリンまで
アルビノ	アルビノ・ソクラテス
ユニークフェイス	痣(あざ)のある人生
難治性脱毛症当事者	体は痛くないけど, 心が痛い!
自死遺族	私って, 自死遺族だからって生きづらいの?
旅行者	420日間世界一周
ブラインドサッカー選手	真実のブラックボックス
NPO理事(車椅子生活者)	What's your excuse? 言い訳をしない。
全盲者	私の“目”は無限大∞
陸上自衛官	自衛隊に入って, 海外を見て
海上自衛官	海のロマンをお伝えします!
航空自衛官	普通の大学生だった私は, 航空自衛隊に就職しました。

### 3.2. 危機と責任

次に, 7月から10月について話します。この3ヶ月間には, 「OBOGリビングライブラリー」, 夏合宿, そしてリビングライブラリー本番が行われました(図1参照)。ここでのキーワードは「危機と責任」です。特に, ゼミ生の活動への関わり方や運営での準備の遅れに悩んだ時期でした。

7月。先生の提案で, 「OBOGリビングライブラリー」<sup>17)</sup>を開催しました。この運営を通して, 私たちは語り手と読み手, そして運営三者の相互関係について学びました。語り手にはどのような役割が期待され, 読み手はどのような期待を持ってリビングライブラリーに参加するのか。語り手と読み手の対話をより有意義にするために運営者が考慮しなければならないことは何か。さまざまな角度から検討しながら, 10月の本番のためのシミュレーションをしました。

16) イベント間近の悪天候により2名が参加を辞退した。

17) ゼミの同窓生を語り手として招き, 社会人としての経験を読み手である他の同窓生やゼミ生に語ってもらった。時間や施設管理などの運営はゼミ生が担当した。



それから夏休みに入ったのですが、ゼミの活動は「開店休業状態」。全体で情報を共有し合うためにメーリングリストを作ったのに、誰も使いません。語り手も、9月の初め頃は3人しか集まっていませんでした。私はだんだん、活動を「する人」・「しない人」、やる気や責任感の「ある私たち」・「ない彼ら」という二項対立でゼミ生を見ていくようになりました。

しかし、9月中旬の夏合宿前にゼミのメンバーと会って話し合ったことが転機になりました。語り手が3人しか集まらない状況ではリビングライブラリーを開催できないという危機感を共有しました。「リビングライブラリーをやる！」と決めた私たちひとりひとりが責任感を持って動きださなければ、イベントを成功させることが出来ない、私はそう伝えました。すると、それまでメールを送ることのなかった人が、活動呼び掛けるメールを送ってくれました。

また、夏合宿でお互いの近況を報告する中で、どんな思いで、どの程度活動に関わっていくかは人それぞれであり、多様だということに気付きました。「みんな学生なのだから条件は『同じ』、活動出来て当然だ」と私が思い込んでいたことが、活動に関して「参加する・しない」の差異を際立たせていたのではないか。語り手に多様性を見ていた私たちでしたが、身近なゼミという集団にも内なる多様性がありました。関わり方は多様でも、みんなの気持ちはリビングライブラリーを開催したいという1つの目標に向かっていました。リビングライブラリーの開催が迫り、一人ひとりが自分の仕事に責任感を持って取り組んでいきました。

危機と責任。その二つの力に助けられ、二項対立の関係を越えることができました。活動への参加状況はまちまちでしたが、本番は一人も欠けることなく獨協大学リビングライブラリーの運営に携わりました。みんな揃いのTシャツを着て集まった時には、イベントを成功させたいという思いがみんなの中にあるのだということを感じ、運営に力が入りました。その結果、大きな事故やトラブルも無く、延べ121名の読み手にリビングライブラリーを楽しんでもらうことができました<sup>18)</sup>。

### 3.3. 共通の目的

そして、私たちゼミ生は現在、春から行っているリビングライブラリー効果

---

18) 本イベントの具体的内容については、工藤 (2011)、Kudo et al. (2011) を参照。

研究を実施しています<sup>19)</sup>。したがって、今はまだ途中段階となりますが、現段階で明らかになっている成果を報告します。

成果を語る際に重要となるのが、「共通の目的」、すなわちここでは、多様性に対して開かれた社会の構築を目指すことを三者が共有しながら活動を行ってきた結果、我々ゼミ生のみならず、読み手、語り手それぞれにも気付きや成長が見られたことが挙げられます<sup>20)</sup>。

まず、読み手の気付きを報告します。実際に、こういった方がいました。

リビングライブラリーに参加するまでは、車椅子生活者は弱くおおいに助けが必要な存在だと思っていました。しかし対話を通して、そうじゃないということに気付かされました。車椅子生活者に対して、ただ単に助けてあげるのではなく、むしろ自立を促す協力が必要なのではないかと考えるようになりました。

(大学生, 21歳, 男性)

自衛隊に対して硬いイメージを持っていたが、インタビュー後、気さくな人だと考えるようになった。

(大学生, 21歳, 男性)

同性愛者に関して言うんだったら普通が異性愛で、普通ではない方が同性愛っていう区切りにして、でも私の心の中ではどっちでも別に良いじゃんって思ってたから、すごい気付かなかったんだけど、心の中ではそこですごい区別をしてみたみたいところに気付いて、あそうじゃないんだ、みたいな・・・どんな経験をしてても、個性の一つみたいなもんだなっていうふうに思えた。

(大学生, 20歳, 女性)

対話をする前には、普通の人を経験しないような事を話すのではないかと考えていたが、実際に対話を通して、違いはない、異常ではないと感じた。

(社会人, 20代, 女性)

---

19) 研究結果については、工藤 (2011), Kudo et al. (2011) を参照。

20) 共通の目的による関係性の変化という視点は、「接触仮説」(Allport, 1954) の学習によるところが大きい。ゼミの授業では、接触仮説についての理論的背景 (Paluck, 2006) や接触仮説に言及したヒューマンライブラリーの効果に関する論文 (Garbutt, 2008) を精読した。

次に語り手の気付きです。

こういう場を設けて頂けるとうれしく思います。そしてこれからの社会はいろいろな人と交流できる人が尊重される世の中になると思います。偏見にとらわれずじゃんじゃんマイノリティ当事者と交流してほしいです。  
(難治性脱毛症当事者, 女性)

ノーマルという言葉を意識するようになり、どれをもってノーマルなのか分からないと思った。目が悪いから眼鏡をかける、歩けないから車いすに乗ることは同じことで、足りない部分を埋めているだけ。社会の認識も、同性愛が広がってきている。これはノーマルがなくなってきているということではないのかと思う。  
(車椅子生活者, 男性)

さまざまな経験を持った人々との出会いがあり、楽しかった。また質問をされることで改めて自身について考えるきっかけになり、面白かったし自分のためになった。  
(世界一周経験者, 男性)

この世の中は、おもしろい。一歩前にふみ出す勇気をいただいた。  
(活動弁士, 男性)

やはり人間は、性や年〔齢〕等、多様な中で生活できるのが自然であると思う。  
(尼僧, 女性)

これらはほんの一部ですが、リビングライブラリーを通して、語り手の方々ひとりひとりにもそれぞれに、新たな発見があったことが分かっています。

さらに、運営者の学びとして「関係性の変化」を挙げたいと思います。ある学生は、現在、アルビノや血管腫などの見た目の問題を扱うNPO団体の方々と交流を持っています。しかし、彼女はリビングライブラリーを行う以前は、見た目に特徴ある人との交流を避けていました。なぜなら、そうした方々とうまくコミュニケーションしてよいのか分からなかったからです。しかし、リビングライブラリーの運営を通して変わりました。アルビノ当事者の方と出会い、共通の目的を持ってリビングライブラリー準備を共にしていく中で、自分とは「違

う人」と思っていた人と自身の間に、多くの共通点を見出していき、徐々に距離が縮まったのです。リビングライブラリーから一カ月経過した今では、一緒にカラオケや飲み会、人生相談などを一緒に行う程親密な関係を築いています。

また別の学生は、身体に障がいを持つ方の自立を支援するNPOの活動に関わっています。しかし、彼女もリビングライブラリーの準備を共にした車椅子生活者の方に出会う前までは、障がいを持っている方との交流に不安を憶え、実際にメールや電話をする際にはなんらかの緊張を感じていました。

二人の学生に共通していえるのは、リビングライブラリーを行う以前、語り手の方を「自分とは違う存在」と認識し、自ら二項対立の構図を作っていました。しかし、共通の目的を共有しながら活動を共に進めていく中で、多くの共通点を自ら見つけ出し、結果として「関係性の変化」を起こしたのです。すなわち、共通の目的の共有が「自分」、「自分とは違う存在」という二項対立の脱却を促し、その結果、友情や仲間のような相互依存的な関係を築くことに至ったのです。

### 3.4. まとめ

それではまとめに入ります。私たちが学んだことを1つの図にしました(図2参照)。

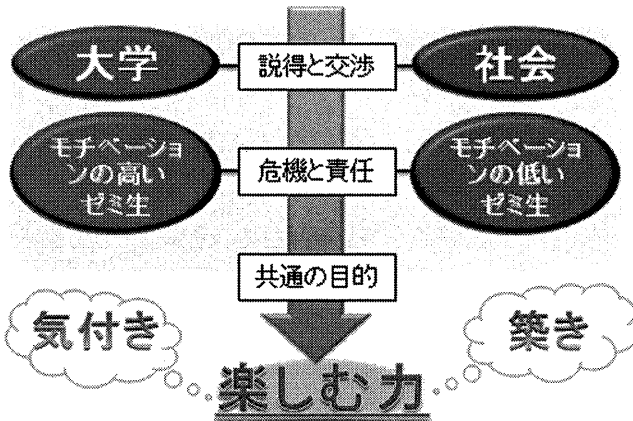


図2 ヒューマンライブラリーの運営を通じた社会人基礎力成長の物語

二項対立。これが全体を通しての私たちの課題でした。

まずは大学と社会の二項対立がありました。これは、「説得と交渉」により乗り越えることができました。

次にゼミ内部でモチベーションの高い学生、モチベーションの低い学生の二項対立がありました。これは、「危機と責任」によって1つになることができました。

こうして、大学と社会、モチベーションの高い学生・低い学生が「私たち」と「彼ら」の壁を越えて、両者を含めた「私たち」になりました。「私たち」を同じ方向に導いてくれたもの、それが多様性に開かれた社会を構築するという「共通の目的」でした。

困難に瀕したときにも、プロジェクトがうまくいっているときにも、私たちが動かし、支えてくれたものがあります。それが「楽しむ力」です。

知らない人に依頼するのは、不安でした。断られたこともあります。失敗は反省になり、反省は成功になり、成功は自信になり、それが楽しくなってきました。

モチベーションの違いに悩むこともありました。しかし、リビングライブラリーが開けないかもしれないという危機に瀕したとき、みんなでなんとかしようと切磋琢磨することは楽しいことでした。

こうしているうちに、遠い存在はじつは私たちと同じだということに「気づき」、仲間たちとも信頼関係を「築く」ことができました。

私たちのリビングライブラリー・プロジェクトは、まだまだ続きます。3月には、リビングライブラリーをコミュニティー再生の手段として採用しているオーストラリア・リズモーに行きます<sup>21)</sup>。リズモーにおけるリビングライブラリーの効果について調べ、私たちが行った日本版のリビングライブラリーのプレゼンテーションを行い、改善できることはないかを意見交換します。その後は、東京大学先端科学技術研究センターにあるリビングライブラリー日本事務局に調査報告書を提出します。世界でもまだ少ないリビングライブラリーの資

---

21) 2011年3月1日から8日まで、リズモーを学生代表5名と訪れ、サザンクロス大学・平和社会的正義センターおよびリズモー図書館での研究発表と実地調査を実施、現地の新聞に取り上げられた('Japanese students booked in', *The Northern Rivers Echo*, 2011年3月10日刊)。リズモーをはじめとするオーストラリアでのヒューマンライブラリーの展開については、工藤(2012)を参照。

料として、今後のリビングライブラリーの発展・普及のために役立つことを願っています。

新たな出会い、新たな発見で私たちは更に成長をすることになるでしょう。楽しみながら、これからも取り組んでいきます。

ご清聴ありがとうございました。

#### 4. おわりに

以上がグランプリ大会での発表内容であるが、ヒューマンライブラリーの運営を通じた「社会人基礎力」の成長を3つの力に分類すると、表2のようになる。「前に踏み出す力（アクション）」については、ヒューマンライブラリーの語り手への出演依頼、運営資金提供の協力依頼、イベント会場の手配や広報を実現させるための大学のソトへの働きかけを積極的に行った。とくに、大学のウチの「私たち（学生）」とソトの「彼ら（社会人）」との二項対立や、語り手との関係において感じられた社会的多数派と少数派の二項対立を、相手への感情移入や説得によって超克することがヒューマンライブラリー運営の中心的な成果として意識化された。また、これらを実現させるためには、それぞれの準備段階において最善の意思決定や説得ができるよう「考え抜く力（シンキング）」が必要であった。さらに、モチベーションや運営方針を巡るゼミ生間の意見の相違を調整しつつプロジェクトを実現させる「チームで働く力（チームワーク）」も重要であった。こうして、「多様性に対して開かれた社会の構築を目指す」という「共通の目的」を多くの人々に浸透させることを「楽しむ力」の重要性が、「社会人基礎力」の3つの力に通底する「kizuki（気付き・築き）」として聴衆にアピールされた。

本稿が示した「楽しみながら他者に働きかけ、共に行動する媒体として成長してゆく物語」は、教員と学生の継続的な対話による振り返り（内省）を通して、いわば恣意的に構築されたものである。発表時間や出場学生の人数についての制限があったために、ヒューマンライブラリーの運営に携わった30名全ての学生の経験を言語化したものではない。このように単純化された物語によって、ヒューマンライブラリー運営の効果を一方的に肯定的に捉えることは慎まなければならない。しかし、大会出場前に多くの練習を行い、他のゼミ生やヒューマンライブラリーを経験していない学生などから得た多くのフィード

表2 社会人基礎力成長の自己評価

前に踏み出す力 (アクション)	大学のウチ（学生）とソト（社会人）， 社会的多数派と少数派の二項対立の超克 ・語り手への出演依頼 ・運営資金提供の協力依頼 ・イベント会場の手配や広報
考え抜く力 (シンキング)	準備段階での意思決定，創意工夫 他者への感情移入と説得
チームで働く力 (チームワーク)	モチベーションや運営方針の相違を調整 「する人」・「しない人」の二項対立の超克
楽しむ力	共通の目的の共有 自分とは異なる「他者」との関係性の変化

バックをもとに内省と修正を重ね、「社会人基礎力」の観点からの成長や学習成果を一つの物語に磨き上げていく作業は、特定の活動への自主的な参加を通じた人間形成、言い換えれば、「投資」を通じた主体（アイデンティティ）の再構築（Norton, 2000）を促進させるうえでは有効だといえよう<sup>22)</sup>。

あとは、本発表（本稿）が論じきれなかった、ヒューマンライブラリーが目標とする「多様性に対して開かれた社会」を考えるための知識や教養<sup>23)</sup>、説得や交渉に必要な効果的なコミュニケーション能力<sup>24)</sup>、文脈に根ざした内省から生まれる知識の他の文脈への汎用性<sup>25)</sup>などの観点から、本稿の執筆者はもちろ

22) Norton (2000) が提唱した「投資 (investment)」は、言語学習に対する学習者の物質的・心理的投資が自らのアイデンティティの再構築につながることを示す概念である。特定の教育プログラムへの投資と参加形態、およびアイデンティティの再構築との関係については、Hashimoto & Kudo (2010) に詳しい。

23) 演習授業では、異文化コミュニケーションの捉え方（丸山2007; Clausen, 2006; Klyukanov, 2005; McDaniel, Samovar, & Porter, 2009）、小集団コミュニケーションとリーダーシップ（Eunson, 2005）、他者化（Holliday et al., 2004）、多文化主義や異文化理解（馬淵2010; Chapman, 2006; Garbutt, 2009）、差別や偏見（好井2009）、共文化コミュニケーション（岩隈2007）などについて、文献精読や議論を通して学習した。

24) コミュニケーション能力については、コミュニケーションの主体が置かれている文脈と、文化や主体（個人）の能力の変化を重視するKudo (2009) やStier (2003) を参考にした。

んのこと、ヒューマンライブラリーの運営に関わったひとりひとりが自らの成長の「何か」を言語化する作業が残されている。本稿は「社会人基礎力」に的を絞って大学生の成長を描いたが、ヒューマンライブラリーのような社会や人々の多様性についての経験的・課題解決型学習が、日本でも今後ますます重要になるであろう、高等教育とりわけカリキュラムの国際化 (Kudo & Hashimoto, 2011) のなかでどのような可能性を持ちうるのかについても議論されることを期待したい。

- 
- 25) 連続する重層的なコンテキストにおける学びの有効性については、「間コンテクスト性 (intercontextuality)」の概念を提示した Engle (2006) を参考にした。

#### 引用文献

- 岩隈美穂 (2007) 「障がい者・高齢者とのコミュニケーション」伊佐雅子 編『多文化社会と異文化コミュニケーション』(140-159頁) 三修社。
- 加賀美常美代, 横田雅弘, 坪井健, 工藤和宏 編 (2012) 『多文化社会の偏見・差別—形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店。
- 工藤和宏 編 (2011) 『獨協大学リビングライブラリー—日頃気付かない自分に気付こう (2010年度ゼミ研究報告書)』獨協大学外国語学部工藤和宏研究室。
- 工藤和宏 (2012) 「偏見低減に向けた地域の取り組み—オーストラリアのヒューマンライブラリーに学ぶ」加賀美常美代, 横田雅弘, 坪井健, 工藤和宏 編『多文化社会の偏見・差別—形成のメカニズムと低減のための教育』(199-220頁) 明石書店。
- 経済産業省 編 (2008) 『今日から始める社会人基礎力の育成と評価—将来のニッポンを支える若者があふれ出す!』角川学芸出版。
- 経済産業省 編 (2010) 『社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために』河合塾。
- 馬潤仁 (2010) 『クリティーク多文化, 異文化』東信堂。
- 丸山真澄 (2007) 「『文化』『コミュニケーション』『異文化コミュニケーション』の語らる方」伊佐雅子 編『多文化社会と異文化コミュニケーション』(188-208頁) 三修社。
- 横田雅弘 編 (2010) 『LIVING-library at Meiji University 2009—この一日で一生の見方を変えてみませんか (報告書)』明治大学国際日本学部。
- 好井裕明 編 (2009) 『排除と差別の社会学』有斐閣。
- Abergel, R., Rothmund, A., Titley, G., & Wootsch, P. (2005). *Don't judge a book by its cover! The Living Library organiser's guide*. Budapest, Hungary: Council of Europe Publishing.
- Chapman, D. (2006). Discourses of multicultural coexistence (*tabunka kyosei*) and the 'old-comer' Korean residents of Japan. *Asian Ethnicity*, 7 (1), 89-102.



- Clausen, L. (2006). *Intercultural organizational communication*. Copenhagen, Denmark: Copenhagen Business School.
- Engle, R. A. (2006). Framing interactions to foster generative learning: A situative explanation of transfer in a community of learners classroom. *The Journal of the Learning Sciences*, 15 (4), 451-498.
- Eunson, B. (2005). *Communicating in the 21st century*. Hilton, QLD, Australia: John Wiley & Sons.
- Garbutt, R. (2008). The Living Library: Some theoretical approaches to a strategy for activating human rights and peace. In R. Garbutt (Eds.), *Activating human rights and peace: Universal Responsibility Conference 2008 conference proceedings* (pp. 270-278). Lismore NSW, Australia: Centre for Peace and Social Justice, Southern Cross University.
- Garbutt, R. (2009). Social inclusion and local practices of belonging. *Cosmopolitan Civil Societies Journal*, 1 (3), 84-108.
- Hashimoto, H., & Kudo, K. (2010). Investment matters: Supremacy of English and (re)-construction of identity in international exchange. *Language and Intercultural Communication*, 10 (4), 373-387.
- Holliday, A., Hyde, M., & Kullman, J. (2004) *Intercultural communication: An advanced resource book*. London: Routledge.
- Klyukanov, I. E. (2005). *Principles of intercultural communication*. Boston, MA: Allyn and Bacon.
- Kudo, K. (2009). Revisiting the emic approach to Japanese interpersonal communication competence: Methodological reflections and future directions. *Intercultural Communication Studies*, 18 (2), 103-114.
- Kudo, K., & Hashimoto, H. (2011). Internationalization of Japanese universities: The current status and future directions. In S. Marginson, S. Kaur, & E. Sawir (Eds.), *Higher education in the Asia-Pacific: Strategic responses to globalization* (pp. 343-359). Dordrecht, the Netherlands: Springer.
- Kudo, K., Motohashi, Y., Enomoto, Y., Kataoka, Y., & Yajima, Y. (2011). Bridging differences through dialogue: Preliminary findings of the outcomes of the Human Library in a university setting. *Proceedings of the 2011 Shanghai International Conference on Social Science (SICSS)*. [CD-ROM] Retrieved 9 October, 2011 from the Human Library website: <http://humanlibrary.org/paper-from-dokkyo-university-japan..html>
- McDaniel E. R., Samovar, L. A., & Porter, R. E. (2009). Understanding intercultural communication: The working principles. In L. A. Samovar, R. E Porter, & E. R. McDaniel (Eds.), *Intercultural communication: A reader* (12th ed.) (pp. 6-17). Belmont, CA: Wadsworth.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*. Harlow: Pearson Education.

- Paluck, E. L. (2006). Diversity training and intergroup contact: A call to action research, *Journal of Social Issues*, 62 (3), 577-595.
- Stier, J. (2003). Internationalisation, ethnic diversity and the acquisition of intercultural competencies. *Intercultural Education*, 14 (1), 77-91.

## Living with Diversity:

### A Narrative of Growth in ‘*Shakaijin Kisoryoku*’ (Basic Skills to Work in Society) Through the Operation of the Human Library

Keywords: diversity; Human Library; *shakaijin kisoryoku* (basic skills to work in society)

KUDO Kazuhiro, YAJIMA Yusaku,  
MOTOHASHI Yuri and ENOMOTO Yuki

#### Abstract

In 2006 the Japan’s Ministry of Economy, Trade and Industry (METI) conceptualised ‘*shakaijin kisoryoku*’ (translated as basic skills to work in society), also known as ATT (action, thinking and teamwork), as a desired learning outcome of higher education. In the following year, the ministry launched the first ‘*Shakaijin Kisoryoku* Grand Prix’ by mobilising seven universities, and the number of participating universities has grown significantly, to 100 in 2010. In this context, the authors (three students and their supervisor) participated in the 2011 Kanto qualifying Grand Prix that was held in November, 2010. The participation involved a 15-minute presentation and four-minute question-and-answer session, which successfully offered a first-person narrative of students’ growth in *shakaijin kisoryoku* through the operation of a one-day Human Library. Based on this experience, the present paper sets out to achieve two objectives: (1) to explain the backgrounds and main objectives of the Human Library and (2) to highlight students’ development of ATT by focusing on the preparation and outcomes of the Library. The authors’ experience supports the *raison d’être* of the Human Library as a bridge between people of different sociocultural backgrounds and as a powerful instrument to nurture students’ capacities to act on differences. It also suggests that active involvement in making the ‘narrative of growth’ through continual reflections and dialogues enhance greater self-

reflexivity of the students, which could further strengthen their awareness of intercultural learning and personal growth.

執筆者紹介：

工藤和宏 獨協大学外国語学部英語学科専任講師

矢島祐作 獨協大学外国語学部英語学科卒業生（ミネソタ州立大学マンケイト校大学院修士課程在籍）

本橋由理 獨協大学外国語学部英語学科卒業生

榎本佑紀 獨協大学外国語学部英語学科卒業生